

庚申堂古墳の調査

京都府立大学文学部考古学研究室

1. 調査の経緯

京都府立大学文学部歴史学科では、2017年8月27～29日にかけて学部2回生を対象とした課外プログラムである文化遺産学フィールド実習を、兵庫県神崎郡神河町でおこなった。実習の最終日である8月29日には神河町福本区に存在する庚申堂で調査をおこなったが、その際境内で須恵器が表採された。

庚申堂境内に庚申堂古墳という名称の古墳が存在することは、古くから指摘されていた。1942年に刊行された『神崎郡誌』には、庚申堂古墳について以下のように記述されている。

粟賀村福本字山根、庚申堂境内にある。封土悉く崩れ石廓又破壊して全く原形をとどめてゐないが、今より約五十年以前は石廓の中に入ることを得たといふことであり、古老の言によれば、素焼きの土器が多く存していたといふ。

このことから、過去には横穴式石室を有していたことや土師器が存在していたことが推察される。また、1968年に刊行された『全国遺跡地図』にも庚申堂古墳の位置についての記載がある。このように『神崎郡史』や遺跡地図で庚申堂古墳の存在が指摘されているため、今回表採された須恵器も古墳に関係する遺物である可能性が高いと判断した。

これらの経緯から、庚申堂古墳の現況を把握する必要が生じたため、2018年2月10日に



図1 庚申堂古墳の位置と周辺の遺跡



図2 庚申堂境内全景



図3 境内に分布する石材



図4 落ち込み状の地形

平板を用いた簡易測量調査をおこなった。調査には京都府立大学文学部考古学研究室の菱田哲郎のほか、近藤史昭（京都府立大学大学院生）、大須賀広夢、岡田大雄、鈴木康大（京都府立大学学生）の4名の学生が参加した。また、調査の際には神河町教育委員会・竹国よしみ氏、加東市教育委員会の藤原光平氏にご教示をいただいた。（大須賀広夢）

2. 表採須恵器について

表採した資料は1点のみである（図5）。器種は甕の胴部である。残存している部分の高さは8.8cm、幅は7.7cm、厚さは最も薄いところで1.1cm、最も厚いところで1.2cmである。外面には格子目印文がみられ、自然釉がかかる。内面には同心円の当て具痕がみられる。焼成は堅緻で、胎土には長石、鉄分を含む。このような特徴から直径の大きな甕の胴部になると判断され、6～7世紀に比定される。（近藤史昭）

3. 測量の成果

平板測量の結果、境内に存在する石材の分布状況、および墳丘の裾部と考えられる落ち込み状の地形を確認できた（図2～4、6）。石材については横穴式石室を構成していたも

のと考えられる。ただし、分布している石材の中には明らかに材質の異なるものが存在しており、すべてが石室材であったわけではないようである。墳丘の封土については完全に失われ、石室も原形をとどめておらず全体の残存状態は悪い。また、墳丘南西側はヒノキの巨木によって大きく浸食されていた。

墳丘の周囲に存在する落ち込み状の地形から推測すると、墳丘の範囲は東西が2.8m、南北が6.1mである。しかし、今回調査できなかった東側フェンスの外側にも落ち込み状の地形が続く可能性があるため、墳丘の東西についてはさらに延長することが考えられる。

なお、ヒノキの西側にある常夜燈の基礎は、付近の堂屋敷廃寺の礎石と伝えられている。

今回の調査によって、過去の文献に詳細な記述のなかった庚申堂古墳の現況及び、墳丘の裾部と考えられる落ち込み上の地形を把握できたことは大きな成果と言える。ただし、今回の調査は平板を用いた簡易測量のみであったため、墳丘規模や石材などのより詳細なデータについては今後の調査の進展に委ねたい。（大須賀広夢）

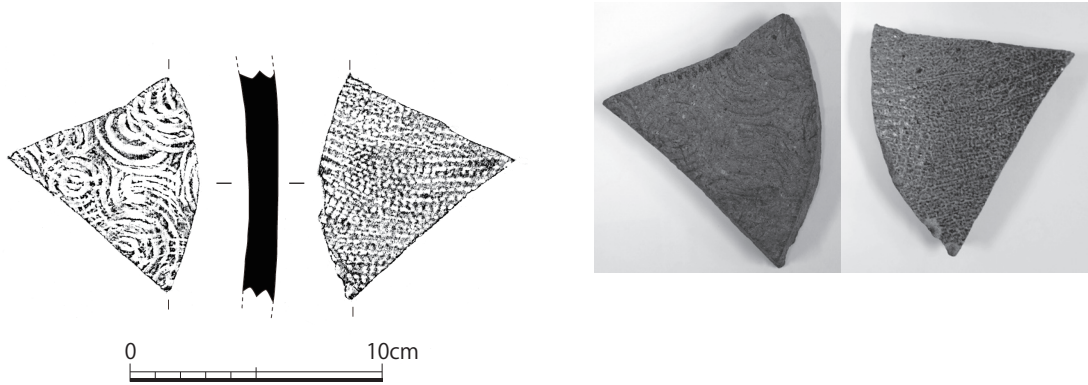


図6 表採須恵器実測図および写真 (S= 1/3)

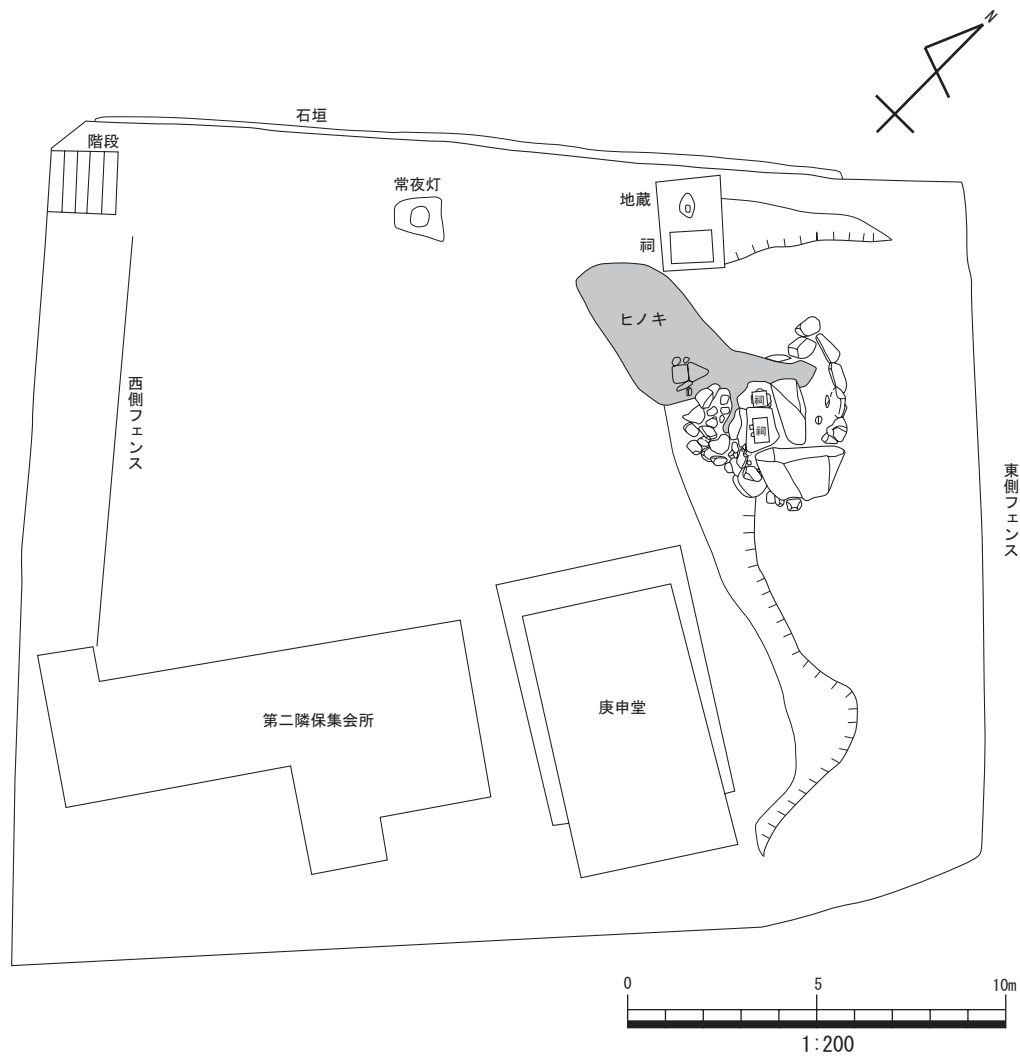


図7 境内平面図 (S= 1/200)

【参考文献】

兵庫県神崎郡教育会 1942 『神崎郡誌』

文化財保護委員会 1968 『全国遺跡地図』

同上 『全国遺跡地図：史跡・名勝・天然記念物および埋蔵文化財包蔵地所在地地図』 兵庫県